

論文の内容の要旨

論文題目 鑑賞による表現の触発プロセス解明と触発を
利用した教育実践の開発とその効果検証

氏名 石黒千晶

現代、芸術などの新しい価値を創造する活動が経済や文化を活性化させる上で重要である(Florida, 2003; Bereiter & Scardamalia, 2006)。このような社会では、芸術を専門としない市民も含めて、鑑賞や表現など多様な芸術活動に参加することが重要視されている。芸術を専門としない市民も芸術活動に参画することで個人レベルでの文化的な生活だけでなく、社会レベルで芸術文化を活性化できるのである(e.g., Small, 1999; Holden, 2006)。このような背景から芸術を専門としないが、芸術などの創造活動の過程や方法を理解し、それに親しむ態度や習慣を持つ市民(創造的教養人)を育成する必要性が叫ばれている(縣・岡田, 2013)。実際に、美術や舞踊など様々な領域で総合大学の学生を対象として創造的教養人を育成するための教育実践が蓄積されている(e.g., 縣・岡田, 2009ab; 中野・岡田, 2012)。これらの教育実践は創造的教養の一部である創造活動の過程や方法の理解や、創造活動に親しむ態度を育む上では一定の成果を挙げているが、創造活動に親しむ習慣を育成するかどうかはわかっていない。

では、創造的教養を育成する上で、芸術を専門としない市民のどのような創造活動を促進すればいいのだろうか。美術教育に関する研究では、芸術活動として鑑賞と表現を接続することが近年の課題とされ、鑑賞と表現の両方を行うような実践報告が増えている(赤木・森・山口, 2006)。実際、芸術家など日々真正な創造活動に従事している人の事例をみると、彼らは鑑賞や表現を別々に行っているわけではないことがわかる(e.g., Chemi, Jensen, & Herstard, 2015)。彼らの創造活動は *inspiration* という言葉と共に語られるこ

とが多く(e.g., Harding, 2012), 外界とやり取りしたり, 他者作品を鑑賞したりすることが, 彼らの新しい表現の源になると言われている(高木・岡田・横地, 2013)。本論文ではこのような現象の中でも, 他者作品を鑑賞することで表現への動機づけを得ることを鑑賞による表現の触発と呼んだ。そして, この現象が起きる心的プロセスを検討すると同時に, その知見に基づいて触発を促す教育実践を開発することで, 日常的に芸術活動に親しむ創造的教養人を育成するための方法を提案することを目的とした。

第Ⅰ部(序論)に次ぐ, 第Ⅱ部は鑑賞による表現の触発の心理プロセスを明らかにすることを目的として, 研究 1 では鑑賞や触発の先行研究をもとに, 鑑賞による表現の触発の心理プロセスに関する理論的モデルを構築した。このモデルでは, 鑑賞から表現の触発に至るためには, 他者評価のプロセスだけではなく鑑賞者自身の表現を省察するプロセスが必要であることを主張した。このように自分と他者の両方の表現に注意を向け, 両者を比較して表現の動機づけを得るためには, 自己と他者の表現を関連付けたり, 他者作品から解釈した新しい価値を自分が達成可能かを評価したりする過程が重要であることも指摘した。

研究 2 では研究 1 で示した鑑賞による表現の触発プロセスモデルに基づいて, そのプロセスに影響する要因として個人の特性要因(美術活動経験と表現への自己評価)と鑑賞プロセス, 鑑賞する作品スタイルに焦点を当て, それらがどのように表現の触発に影響するかを実証した。具体的には, まず, 表現への自己評価や鑑賞プロセス, 触発体験を測定する心理尺度を作成した。次に, それらの尺度を利用して, 20代から60代の芸術を専門としない男女を対象にして, 複数の絵画作品を鑑賞するインターネット調査を行った。その結果, 表現への自己評価は表現の触発に直接的な影響を持つと同時に, 他者作品の創作プロセスを評価する鑑賞や自分と他者の表現を比較する鑑賞を媒介して表現の触発を促進するが, 美術活動経験は表現の触発への直接的な影響は持たず, 表現への自己評価, 鑑賞プロセスを経て表現の触発に影響することがわかった。この結果から, 芸術を専門としない市民の鑑賞による表現の触発には, 美術活動経験, 表現の自己評価や他者作品の創作プロセスの評価, 自分と他者の表現の比較といった鑑賞過程が影響していることがわかり, 研究 1 のモデルで主張した鑑賞による表現の触発プロセスの中心的な仮説が実証された。

以上の 2 つの研究から, 芸術を専門としない市民の鑑賞による表現の触発を促進するには, 美術活動経験を増やすことの他に, (1) 表現への自己評価を高めること, (2) 他者作品の創作プロセスを評価する鑑賞, (3) 自分と他者の表現を比較する鑑賞が重要であることが明らかになった。本論文では, これらの表現や鑑賞への態度を触発の素地となる態度と呼び, 第Ⅲ部では芸術教育によって触発体験が促進されたり, 触発の素地となる態度が獲得されたりするかどうかについて検討した。

研究 3 では芸術教育が外界や他者による触発や, 触発の素地の獲得に有効であるかどうかを検討するため, 芸術教育に日常的に関わっている芸術専攻の大学生と非専攻の学生を比較した。その結果, 芸術専攻の学生は外界や他者による触発を経験する頻度や強度が非専攻の学生よりも高く, 触発の素地となる表現への自己評価や他者作品の創作プロセスを評

価する鑑賞態度、および、自分と他者の表現を比較する鑑賞態度も非専攻の学生よりも高かった。また、各学生の外界や他者による触発と触発の素地との関係性を検討した結果、芸術教育は触発の素地を形成し、外界や他者による触発経験を促進する可能性が示唆された。

研究 4 では触発の素地を支える知識や能力を獲得させたり、外界や他者による触発を体験させたりすることを目的とした教育的介入を組み込み、総合大学の学生を対象とした芸術教育実践を実施した。この芸術教育実践は、触発の素地となる知識や能力の獲得を支援する教育プログラム 1 と、外界や他者による触発の体験を支援する教育プログラム 2 から成っていた。具体的には、教育プログラム 1 は「表現を実際に体験すること」「特定の領域の具体的な知識や技術を身に着けること」を支援する教育的介入を行った。教育プログラム 2 では「当該領域の表現者や作品に出会（合）うこと」を支援する教育的介入を行い、それらの教育プログラムでの学びを促進するため、「自分の表現体験を省察して、そこから学ぶ」ことを支援する課題を学生に課した。その結果、教育プログラム 1 を通して触発の素地となる知識や能力が獲得されたことが示唆された。また、教育プログラム 2 を通して、学生は教育プログラム 1 で学んだ知識を反映して他者作品を鑑賞することができるようになり、他者作品の鑑賞やその後の省察過程で自分と他者の表現を比較し、自分の表現へどのように発展するかを考えるようになったことがわかった。さらに、授業全体の効果を検討するため教育実践終了から 1 年後に追跡インタビューを行った結果、インタビューに参加した 14 名の学生のうち 13 名が写真撮影を継続し、そのうち 7 名が芸術表現としての写真撮影を継続していたことがわかった。これらの結果から、本教育実践は芸術を専門としない学生が触発の素地を獲得したり、実際の鑑賞で触発を体験したり、自らの写真活動を表現へと広げたりすることを支援したと言える。言い換えると、本実践は鑑賞だけでなく表現を通して芸術活動に親しむ創造的教養人の育成に貢献したと言えよう。

以上の一連の研究を通して、本論文は鑑賞から表現への動機づけが生まれる有機的な心理プロセスを明らかにした。そのプロセスとして、鑑賞による表現の触発のためには鑑賞過程で自分と他者の表現を比較することが重要であり、そのためには、作品評価だけでなく、自分とその作品の関連性を評価したり、自分がその作品や新しい表現のアイディアが達成可能かどうかを評価したりすることなどが重要であることがわかった。つまり、鑑賞者は何の前触れもなく表現を行うのではなく、作品を鑑賞する中で様々な価値を解釈すると同時に、それを自分の表現活動と結びつけ、新しい表現の可能性を考えるのである。この知見は、芸術心理学においても乖離していた鑑賞と表現 (Tinio, 2013) を接続するメカニズム示しているものであると言えよう。また、この知見は、先行研究で *inspired by* と呼ばれていたプロセス (Thrash & Elliot, 2003, 2004) を明らかにしたものであり、「自然に沸き上がった」とか「降ってくる」などの芸術創造における *inspiration* のイメージ (Weisberg, 1986) を覆すものであると言える。

教育への応用という点でも、本論文は新しい知見を提案した。そもそも触発自体が、近年の芸術教育の中でも新しい視点であるが、本論文は鑑賞による表現の触発プロセスに基

づいて触発を促進するための教育方法を提案した。特に、本論文では触発を促進する要素として、「異なるもの」と「深く関わる」こと(岡田, 2016)の他に、新たに他者やその作品と出会(合)う前の「触発の準備」が必要であることを指摘した。触発の準備としては、例えば、学習者が自ら表現するという目的を意識させたり、芸術領域の表現の知識や技術を獲得させたりすることが考えられる。今後は、このような要素をいかに組み合わせて教育実践を行うかを検討する必要がある。そうすることで、単に芸術創造の方法や過程を学ぶだけではなく、自らも何らかの形で芸術文化に関わる人であるという文化的自己を持った人材を育成することが可能になるだろう。